

### 1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2875001501		
法人名	医療法人社団 恕和会		
事業所名	カルム箕谷		
所在地	神戸市北区山田町下谷上字かんじや7番3号		
自己評価作成日	平成30年11月	評価結果市町村受理日	平成31年3月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 コミュニティ・サポートセンター神戸		
所在地	神戸市東灘区住吉東町5-2-2 ビュータワー住吉館104		
訪問調査日	平成30年12月17日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・入居者ひとり一人に合わせた生活スタイルで安全安楽に過ごしていただけるよう個別のケアを重視している。  
 ・医療面で母体である松田病院、すずらん病院、また、併設している訪問看護ステーションと連携し、日々の体調管理や病状の把握、異変の早期発見、急変時の早期対応が行える体制を取っている。  
 ・季節を五感で感じられるような行事や外出、ボランティアによる催し等により、地域住民との交流や社会参加を図っている。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

地域で実績ある病院が13年前に開設した事業所で、入居者の医療に対応出来る支援体制がある。災害対策を通じて、避難場所の提供や支援の申し出を受け、地域との繋がりも深まった。玄関やユニット入口を昼間は施錠しないが、チャイムと声かけにより、安全は確保出来ている。入居者は日々の食事で盛り付けや洗い物を積極的に行い、アクティビティとしてのご飯作りではメニュー考案から包丁を握るまでを楽しんでいる。職員が日々のケアで共有したい申し送り事項等はITシステムにより全職員が把握できている。年に2回家族会を開催し、半数以上の家族や後見人も出席して、様々な要望や意見が出されている。入居者が終末期を迎え看取りの希望がある時は、医師である施設長と管理者等が可否について詳しく説明して納得を得ている。今年も1人の穏やかな最期を家族と共にお見送りできた。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および第三者評価結果

グループホーム カルム箕谷

評価機関:CS神戸

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「本来持っている固有の機能を大切に、できるだけ自分らしく過ごせるように援助する」の理念に基づき介護計画書を作成し、職員間で共有し実践に当たっている。	理念に沿った基本方針が7項目定められており、常に目の届く壁面に掲示して意識づけがなされている。入居者の尊厳を大切に、安全で安心が得られる介護に努めており、月に1回のミーティングで話し合い実践に反映している。	地域密着型サービスは入居者が地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスであり、理念は事業所がめざすサービスの在り方を端的に示し、常に立ち戻る基本的な考え方を示すものです。意義や役割を考えながら検討されることを期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩や近くのスーパー、コンビニへ買い物に行き、季節によって異なる町の景色を見ながら、地域の方と挨拶を交わし、地域の一員として生活している。	近くを散歩しながら近隣の方々とも挨拶やお話を交わしている。同地域のお茶の先生や二胡演奏者の来訪もある。今年は地域一帯が地震や水害に遭い、対策の話し合いが多かった。避難場所の提供や支援の申し出も受け、地域との繋がりが深くなった。	事業所設立から10年以上を経て、地域の中でも十分に認知されていると思われれます。気さくに来もらえるような工夫として催しや講習会、季節の行事などのお誘いを企画検討されることを期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の出席者に職員がどのようにケアをしているか、現場の様子を紹介、報告し、また、質問があれば説明し理解をいただき、それぞれ持ち帰って拡散してもらっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では日ごろの様子をスライドショーで紹介している。会議の中では質問や意見、提案、助言等々いただき、運営やサービスに反映している。	入居者、家族、民生委員、自治会長、あんしんすこやかセンター職員、元社協職員、事業所職員をメンバーとして、2カ月に1回運営報告と意見交換を行っている。質疑応答も活発にあり、災害時の避難場所の確認や事故対策などが話し合われた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	介護保険や運営についてわからないことや聞きたいことがあれば電話にて質問し、アドバイスをいただいている。	書類を提出する時はできるだけ市役所に出向き担当者や会うなどして連絡を密にしている。今年は災害対策や治水の問題が多く発生し、介護保険関係以外の課にも相談したり、来てもらったりすることがあった。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3ヶ月に1回、身体拘束廃止の委員会を開催し、内容を議事録にまとめ、職員全員に周知している。また、年に2回身体拘束に関する研修を施設内で行い、正しく理解できるよう、場を設けている。	夜間以外は玄関やユニットのドアの鍵は開放しているが、チャイムが鳴るので出入りの確認はできている。ベッドのセンサーマットは家族と相談して利用している人もいる。年に2回研修を行い、身体拘束のないケアに取り組んでいる。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に1度は全員参加で研修を行っている。それぞれが意識を持ってケアに当たるよう啓発している。また、予兆がないか職員間で配慮し合っている。	年に1回研修を行って不適切なケアがないように話し合っている。管理者は定期的に職員面談をして疲労やストレスがないか気をつけている。今年は外部にストレスチェックを依頼して、働き方やメンタルヘルス対策を行っている。		
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	昨年、今年と実践者研修を2名が受け、権利擁護、成年後見人制度について学ぶ機会があった。また、入居の契約時に成年後見制度のパンフレットをお渡しし、軽く説明している。	実践者研修で制度について学ぶことができたが、事業所内での職員研修は行っていない。成年後見制度を利用している入居者はいるが、関係機関との話し合いや特別な支援はしていない。	権利擁護の制度は解かりにくいものです。今後独居の方や家族が県外に離れて住む場合も多くなるので、制度の利用者の増加が予想されます。専門職の出前講座もあるので定期的な研修として取り入れられることを期待します。	
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	締結時は時間を取って説明している。その中で質問しやすい雰囲気作りを心がけ、理解、納得できる十分な説明を心がけている。改定や見直しの場合もその都度説明し了承のサインをいただいている。	本人・家族の不安や疑問に答えながら、契約書、重要事項説明書などをていねいに説明している。追加事項として体調の急変時の対応、終末期の医療体制及び看取りに関する指針や入居時リスクの説明も行い、同意を得ている。		
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議においてご家族の意見を伺い質疑応答の内容を議事録に残し、他のご家族にも送付している。意見、要望を一旦受け止め、内部で検討後、どう対応するか報告をしている。	年に2回家族会を開催し、半数以上の家族の方々や後見人も出席し、話し合いを行っている。2月には家族アンケートを取り要望や意見をうかがった。駐車場の問題、災害対策の取り組みやホームページ開設などが話題となり、検討している。		
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のミーティングや年2回の考課表、その他随時いつでも職員の意見や提案を聞き取っている。どうなったかの報告、周知もしている。	フロア別に月に1回スタッフ会議を行っている。会議前に職員は気づきやアイデアを提出し、これまでにローテーションの改善や洗濯室の消毒、トイレのバケツ処理など改善された。管理者はいつでも気軽に職員の相談を受けている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	賞与時期に面談を行い、個々の思いを聴き取って検討したりアドバイス等行っている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	常勤、非常勤とも施設内外の研修を受けられる体制の確保に努め実践している。初任者研修、実務者研修の推進や介護福祉士の取得等、スキルアップする場を整えている。			

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14			○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	実践者研修やケアマネの研修、またグループホーム連絡会は特に同業者間の意見交換の場となっている。そこで得た情報で知識の幅を広げ、それを現場に持ち帰り運営上の参考にしている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15			○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の面談時に聴き取りを行い、不安や要望等について現場職員と情報を共有し、安心できる環境を整える準備を行っている。受け入れ体制を整えることと、傾聴に時間を割くことにより少しずつでも信頼関係が築けるよう努めている。		
16			○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の要望が本人にとってニーズか否か、お気持ちを尊重しつつ一緒に考え、話し合っ方向性を決めている。		
17			○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所前後のアセスメントを何度も行い、その時に何が必要か、ご家族、本人、職員をはじめ、周りの助言等もいただき、グループホームでできることを見極め、対応するよう努めている。		
18			○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員が介助で手が離せないときや忙しいときには入居者様が洗い物や洗濯物量みなどをしてくださることがある。「言ってくれたらやるよ」と言葉をいただき、助け合っていることを実感することがある。		
19			○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者の支援に際し、ご家族の意見を聞き取り、無理のない範囲で役割を担っていただくよう協力を得ている。		
20	(11)		○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	施設に訪問理容に来てもらっているが、昔から通っている散髪屋がある方は入所後もご家族付添いで利用してもらっている。	旧知の友人が定期的に訪ねて来たり、同敷地内のデイサービスに知人が通所する日に合わせて出向いている人もいる。家族と一緒に食事やお墓参りなどに出かけることもある。仏壇を置いている居室にはお寺からお坊さんが来訪している。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21			○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず に利用者同士が関わり合い、支え合えるような 支援に努めている	職員は全体を意識して見守りを行っている。 入居者の一人が輪に入れないようなときや 会話がうまく噛み合わないとき等、職員が介 入し、その場の雰囲気調整している。		
22			○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関 係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族 の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後にこちらから連絡して様子を 確認したり、何かあったときには電話をか けて聞いてもらえることもある。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(12)		○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握 に努めている。困難な場合は、本人本位に検討し ている	共同生活の為、意向どおりの生活が送れな いときもある。しかし、出来る限り今までの 生活に沿った、無理のない生活を送って いただけよう配慮している。	入居者の思いや意向は入居前の生活・趣味 等を記録したフェイスシートのほか、資料や 本人の言葉だけでなく身振りや表情からも読 み取っている。日々のケアにおいて共有した い申し送り事項はITシステムを活用して、全 職員が把握し、思いや意向の把握に繋げて いる。	
24			○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環 境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努 めている	入所前の生活で行っていたこと、習慣など、 継続できることは継続し、施設内で再現でき るよう努めている。どのように思っているか、 どうしたいか、話の中だけでなく表情やしぐ さからも汲み取り、チーム内で共有してい る。		
25			○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する 力等の現状の把握に努めている	個々の望むことを日々の生活の中で読み取 り、記録に残して職員間で情報を共有し、カ ンファレンスで検討、体調や精神状態に合 わせてケアに生かせるよう心がけている。		
26	(13)		○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方 について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、 それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即 した介護計画を作成している	ケア優先の業務で日程調整が難しいため、 家族、関係者の意見はカンファレンスの事 前事後に聴き取り、検討して計画に反映し ている。	入居者を担当する職員はケアを通じてよく本 人と関わり、ミーティング等で情報を共有しな がら日々モニタリングをしている。3ヶ月に1 回は管理者・計画作成担当者・介護職員を 含む3人以上のメンバーでカンファレンスを行 い、介護計画を見直している。	
27			○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を 個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら 実践や介護計画の見直しに活かしている	実践した結果やその後の様子をパソコンに 記録し、申し送りをして周知できるようにして いる。様々な変化に応じて見直しも行ってい る。		

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者は日々変化している。昨日できたことが今日できないことも、またその反対もある。季節や体調にも左右される為、いつも同じケアを行う部分とそうでない部分を職員は自然に判断し対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近くの食堂へ行ったり、公園で景色を眺めたり、近隣でリフレッシュできる場に出かけている。北区拠点のボランティアにも来てもらって楽しんでもらっている。		
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	医療だけでなく全般的に自由に選択してもらっている。母体の松田病院、すずらん病院以外の皮膚科や眼科等の受診は基本ご家族で対応していただくが付き添いできない場合は施設で対応している。	契約時にそれまでの主治医か、協力機関の松田病院かを選択してもらっているが、現在は全入居者とも松田病院がかかりつけである。主治医は月に2回、1回7～8人を往診している。歯科は協力医が月に1～2回訪問して診療と口腔衛生指導をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	些細なことでも気になる事があれば訪問看護師に相談している。適切にアドバイスいただき、ご家族に報告し、施設内で対応したり、医療機関に繋げている。		
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の介護サマリー、退院時の看護サマリーを通じ、情報を共有している。入院中は面会に行き状況把握に努め、地域連携室の担当者と直接会って関係づくりに努め、よりよい受け入れ態勢を整えるようにしている。	入居者が終末期となり、看取りが可能と判断される場合は、医師である施設長と管理者、看護師などが同席のもとで事業所の対応について詳しく説明し、家族が希望する場合は看取りを行っている。今年も1人の穏やかな最期を家族と共に見送ることができた。	
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期と予測された時点で、ご家族と関係者が今後について話し合える場を設け、意思の確認を行っている。当施設で対応可能な範囲を説明し、理解をいただいている。	入居者が終末期となり、看取りが可能と判断される場合は、医師である施設長と管理者、看護師などが同席のもとで事業所の対応について詳しく説明し、家族が希望する場合は看取りを行っている。今年も1人の穏やかな最期を家族と共に見送ることができた。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	インシデント・アクシデントの報告書を元に事故発生時の対応方法を職員に周知している。また、「入居者救急時対応手順」を介護現場に掲示している。		

自己	者 第 三	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回非難訓練を実施し、日中、夜間を想定した非難の仕方、消火器の使い方を体験。非難場所について地域の方が情報を寄せてくださる。	年2回消防署に届出をして、昼・夜間想定消防訓練を設備業者立会いのもとで行っている。事業所背後の山と水路からの水害危険があり、今年の大雨でも浸水しかけた。ハザードマップ以外の防災情報提供などで地域の住民・事業所とは協力が出来つつある。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は理解してケアに当たっているが、不適切な言葉かけ、ケアがあった場合には互いに注意できる関係であるべく、事あるごとに職員間で話し合い、意識向上を図っている。	同性介助などトイレや浴室でのプライバシー保護に配慮し、不在時でも居室に立ち入る時は必ず本人に声をかけ許可を得ている。職員に入居者の尊厳を損なう言葉かけやケアがあった時は目につかない所へ呼んで注意したりミーティングで振り返っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉ではなく表情で気持ちが表れる場合も含み、入居者が発信したサインを見逃さないよう、観察している。きっかけを作り、何をしたいか見極め、自己決定できるよう誘導している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な流れに強制的に従ってもらうことはない。眠りたいときは寝てもらい、しゃべりたいときはしゃべってもらっている。(その後悪い影響が出ないと思われるとき)		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節感が違ったり、前後ろが反対だったり、不具合のあるときは配慮しながら変更を促し、自分で服を選ぶことができる楽しさや自信が感じられるよう支援している。		
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	湯煎タイプの食事のため、簡単な盛り付けの手伝いやアクティビティでのご飯作りを分担して調理を楽しんでもらっている。食後は毎回、数人で食器を洗い、片付けてもらっている。	普段の食事では、盛り付けの手伝いや洗い物を多くの入居者が積極的に行っている。2～3ヶ月に1回はメニュー段階からのご飯作りを職員と一緒にいき、時には包丁も握るなどして楽しんでいる。誕生日などで寿司・うなぎ等の出前を取ることもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重管理の為、白米に雑穀を混ぜたり、嚥下状態や咀嚼力に合わせた食事形態等、個々に合った状態で提供している。1日の目標水分量を確保できるよう、小まめに水分摂取も促している。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42			○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	必要に応じ、ケアに付いている。訪問歯科による専門的なケアも定期的に行い、職員がケアの仕方を教えてもらい、日々のケアに生かしている。		
43	(20)		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表で個々の排泄パターンを把握し、事前にトイレへ誘導し失敗を減らすように努力している。汚染の回数が減れば紙から布への変更も検討している。	入居者の排泄パターンを把握して、よいタイミングでトイレ誘導の声掛けをしている。平均要介護度が2.1で、排せつに関しては比較的自立度が高いこともあり、2Fユニットで介助の必要な人が数人いる他は、ほぼ全員がトイレでの排泄が出来ている。	
44			○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェック表に排便の有無や水分摂取量を記録し管理している。便秘気味の方には朝一番のお水やヨーグルトの提供、また、運動等、規則正しい生活を促している。		
45	(21)		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的な入浴の予定表は作っているが、体調やそのときの気分によっても変更している。気持ちよく入浴していただくために、入居者と話を決めて決めている。	週2回は入浴できるよう、午前中から入ってもらう。入浴を拒む方もいるが、午後には時間をずらして声をかけたり、曜日を変えて誘うようにしている。同性介助が可能なよう、ユニットに男性職員を1人ずつ配置した。冬至にはゆず湯を楽しんでもらっている。	
46			○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中に適度な運動をすることで安眠できるよう気を配っている。照明や室内温度の調整も個々に合った環境を心がけている。		
47			○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	基本的な情報は周知し、薬情をいつでも確認できる所に整備している。薬剤に関しては全般的に薬局に業務委託している。新しい薬が始まったときは特に状態の変化を細かく記録し、訪問看護に報告、医療機関連携のもと調整してもらっている。		
48			○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外出や行事、食堂の音楽、物づくり等、入居者の趣味嗜好を勘案して選択し、また、得意なことやしたいこと等、話の流れで自然と役割分担がなされるようにしている。		



自己	者第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	家に帰りたいと訴えのある方にはご家族に調整をお願いしたり、服が欲しいと希望されれば一緒に買い物に出かけるなど、柔軟に対応している。最近では機会が少ないが、外出の際にご家族にも参加を呼びかけている。	複数の職員が付き添って2～3人でよく散歩に出かけているほか、買物や喫茶店などにも出かけることがある。遠方への行事外出は運転者確保の関係で回数が減ったが、復活すべく企画中である。地域の節分や夏祭り等にも声はかけてもらっている。	家族アンケートで外出についての評価はやや低くなっています。散歩等外出の様子を写真入り葉書などで家族に伝えることや企画中の行事外出の実現などを期待します。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出したときに機会があれば買い物をしてもらうことがあるが、認知症の方にお金を使っていたことが裏目に出ることもあるので慎重に判断している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	「衣替えをしたいから家族に連絡をしたい」と電話をかけたり、「返事を書きたい」とはがきを書いたり、外部とのつながりを今まで通り続けてもらっている。		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	朝の体操の時間にテレビが反射して見えにくいと入居者より訴えがあり、カーテンを閉めることがあるが、それ以外は外の景色も時々話題にして一緒に眺めたり、外にお花があれば摘んで飾ったりしている。	居間は大きな窓があり明るく落ち着いた雰囲気。壁には季節を感じられる貼り絵や写真が飾られている。2階ユニットではピアノが置かれ入居者の伴奏で合唱したりしている。毎朝窓を開けて換気し、次亜塩素酸加湿器で適切な湿度と衛生環境を保っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者間の関係を日頃から観察し、話が弾むよう、言い争いにならないよう、配慮して席順を決めている。食堂の席だけでなく、廊下にソファやベンチがあり、一人で外の景色を眺めたり、各々、好きに活用してもらっている。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	在宅時に使用していた家具、食器や壁掛け等、使い慣れた物を希望に沿って持ってもらっている。お仏壇を持ってこられている方もおられる。	居室はゆったりしており洗面台・ベッド・小型チェスト以外は入居者が好みの家具等を持ち込むことが出来る。中には小さな仏壇やテレビを置いている人もいる。布団は入居者の持込みだが、シーツ類は職員が週1回洗濯している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	催しがあって移動するときに、階段を使える人は見守りの上、使用してもらっている。また、トイレの場所、電気のスイッチなど、貼り紙や目印を見て自身にて考え、行き着くことができるように思考を凝らしている。		